

# 読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター  
主任研究員 天野敏昭



## 『日本の賃金を歴史から考える』

●金子良事 著 旬報社 1,500円+税

「賃金論は何よりも生活の問題である」（小池和男）の書き出しで始まる本書は、生活問題が多様化し複雑化する現代において、最も身近な賃金の重要性を、戦前期から現代に至る賃金決定の歴史経過の概観を通じて再認識する目的で書かれています。同時に、就業や雇用に関する問題の変遷にも言及し、働く者に対し、生活をより良く送るための賃金や労働のあり方について主体的に考える契機を与えてくれる一書だと思われます。

市場経済下では労働は貨幣換算されますが、著者は、現代の雇用関係には、明治以降の貨幣化する以前の規範が引き継がれているため、賃金のあり方を考える上で、歴史背景の理解が重要であることや、日本的賃金が日本的経営論（終身雇用、年功的賃金、企業内組合）で特徴づけられると考えられているものの、英米等との貿易関係への対応や生産管理手法など外国の考え方の導入、前近代からの遺制を継承している点など、海外の影響や海外との共通性にも着目することが重要であることを示唆しています。

本書では、日本的賃金が誕生する戦前戦時期（第1章－二つの賃金、第2章－工場労働者によって形成される雇用社会、第3章－第一次大戦と賃金制度を決める主要プレイヤーの登場、第4章－日本的賃金の誕生）から基本給中心の賃金体系や雇用形態の変遷を扱う戦後から現代（第5章－基本給を中心とした賃金体系、第6章－雇用類型と組織、第7章－賃金政策と賃金決定機構、第8章－社会生活のなかの賃金）までの経過を分析、紹介されています。

日本の労働規範や雇用社会の原型は、工場労働者の登場に伴って職人と奉公（使用）人の規範が融合して形作られ、工場法（労働基準法）等の労働法とそれに関わる判例法の蓄積によって整備されてきたとのことですが、報酬に対する考え方が、日本は感謝報恩である一方、西洋は受取権利であるという職工の考え方の違い（和田豊治・富士紡専務取締役）を紹介する件は、日本的賃金の文化的背景の一端をうかがえるように思われます。

株式会社制度が定着した当時（明治10～30年代）は、職員層の固定給と職工の複雑な賃金体系

の待遇差がみられ、特に職工の生活設計の面から生活給として賃金制度を検討する必要性がありました。賃金制度を決める主体として、人事部や労働組合（家計調査を行って生活資金の要求に貢献した友愛会が嚆矢）とともに、経営（賃金）コンサルタントをあげ、科学的管理法に基づく出来高給と生活賃金の二大軸への関与や、職務給（規定外業務に対する創意工夫や担当業務外の職務へのインセンティブ低い）から職能資格給（異動による新しい仕事でも、賃金条件を変更せずに処遇できる）への展開、さらに査定を伴う基本給と能率給を中心とする賃金体系の構築に寄与している可能性に言及している点は興味深いです。

賃金決定の歴史は、明治時代以降の政治や農村社会の変革を受けて、工場労働を中心に生産管理手法の導入や家計調査の実施を伴う生活賃金思想から発展を遂げてきたものの、現代では、同一労働同一賃金（同一価値労働）に対する理解が得にくいこと、男女間の賃金格差、非正規雇用にとどまらざるを得ない問題、低廉な家内労働の問題など、働き方の多様化や女性の就業促進の進展がみられる一方、生活賃金の成立の困難性を浮かび上がらせており、賃金のあり方を検討する際に、生活を画一的に理解することでは立ちいかななくなっています。本書ではその解決策は提示されていませんが、現代の就業や雇用の問題を賃金の視点から考える契機を与えてくれると考えられます。

内容は決して平易ではありませんが、身近な賃金の歴史を知り、これからの労働や賃金のあり方について一人ひとりが考える上で、有益な一冊になるのではないかと思います。

### 【著者略歴】

1978年生まれ。経済学博士。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。専門は労働史、社会政策史。主な著作に「戦時賃金統制における賃金制度」（『経済志林』80巻4号）、「戦前期、富士瓦斯紡績における労務管理制度の形成過程」（博士論文）がある。東日本大震災以降、大槌町・釜石市を中心に復興支援活動を続ける。現在は法政大学大原社会問題研究所兼任研究員。